

## ラッパのタイミングから見る「王国」の誕生の時

啓示の書における「王国」の誕生あるいは実現に関する言及は啓示 11:15 と 12:10 の二カ所のみです。

「第七のみ使いがラッパを吹いた。すると、大きな声が天で起きてこう言った。「世の王国はわたしたちの主とそのキリストの王国となった。彼は限りなく永久に王として支配するであろう」(啓示 11:15)

そしてその後続く言葉は「今おられ、かつておられた方、全能者なるエホバ神、わたしたちはあなたに感謝します。あなたはご自分の大いなる力を執り、王として支配を始められたからです」

さて、もう一つの王国の誕生と読み取れる記述は次の箇所です。

「今や、救いと力とわたしたちの神の王国とそのキリストの権威とが実現した！」(啓示 12:10)

これが王国実現に関する言及の2つめです。

なぜ、王国誕生時が2度あるのでしょうか。

11:15では第7のラッパが吹かれた時、12:10はサタンが放逐された時です。この二つは同時点でしょうか？ 様々な証拠の示す所から言えば、この2箇所は明らかに別の時点です。まず、この点から確認しましょう。

11章の最後は、第7のラッパが吹かれ、「王国樹立」と「大バビロン」の滅びを意味する「稲妻と声と雷と地震と大きな雹が生じた。」の記述で終わっています。

そしてそれまでに「地に対する災い」は全て終わっています。

改めて11章の最後の部分を考慮しますと、それがはっきり分かります。

「全能者である神、主よ、感謝いたします。大いなる力を振るって統治されたからです。異邦人たちは怒り狂い、あなたも怒りを現された。死者の裁かれる時が来ました。あなたの僕、預言者、聖なる者、御名を畏れる者には、小さな者にも大きな者にも報いをお与えになり、地を滅ぼす者どもを滅ぼされる時が来ました。」そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。」(黙示録 11:17-19 新共同訳)

ここで、神の支配は開始され、クリスチャンたちに報いが与えられます。つまり殉教者は復活し、敵に対しては最終的な裁き、つまり滅びがあるだけです。この時点で、大患



それで11:15の「王国」の言及は、全ての災いが終了した時点、12:10の「王国」の言及はサタン放逐の直前であり、11:15の時から遡ること1260+1260日（女が養われる期間+聖徒が碎かれる期間）の7年ほど前となります。

改めて、この二つの「王国誕生」記述を読み比べると、双方に明確な違いがあることが分かります。

「世の王国はわたしたちの主とそのキリストの王国となった。彼は限りなく永久に王として支配するであろう」（啓示 11:15）

こちらは、「世の王国は神の王国と[なった]文字通り「王国の支配の開始」です。

「今や、救いと力とわたしたちの神の王国とそのキリストの権威とが実現した！」（啓示 12:10）

その7年前のこの記述は、「王国とキリストの権威が実現した」という表現です。

「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた。」（新共同訳）

こちらは、その「権威」が天に実現したとされていますが、支配を開始したとか、「世の王国」に対する実力行使などを直ちに開始したとは読み取れません。

この「実現」と宣言できたのは、「兄弟たちを日夜訴える者が投げ落とされた」ゆえにと言うのが、その理由です。そして、落とされる直前、その代わりに彼らは「女」の子として「天に、神のもとへ」上げられています。

それで「王国」誕生が2度あるわけではなく、先ず「王権」が確立し、その後、第7ラッパ時に、王権の行使を開始するということです。

これについては、ルカの十ミナの例えの中にその表現を見いだされます。

「ある高貴な生まれの人が、王権を確かに自分のものとして帰るため、遠くの土地へ旅行に出ました…」（ルカ 19:12）

「ものみの塔」はこの二つの王国の記述を混同しているため、聖書解釈に多くの矛盾が生じています。

福音書の中でイエスが用いておられる「臨在」（ギ語：パルーシア）は常に、王国の支配を行使する時点にのみ言及され、王権を確立した時点には適用されてはいません。

そもそも、この王権樹立のタイミングについて言及しているのは黙示録のこの聖句 1箇所であり、他のどこにもこれに言及した箇所はありません。

記述そのものがないのですから当然、最終審判の時点以外の時点を指して「臨在」の語を用いようもありません。

ルカによる福音書の「終わりのしるし」に関する記述はこうなっています。

「あなた方はまた、これらの事が起きているのを見たなら、神の王国の近いことを知りなさい」（ルカ 21:31）

「これらの事」に含まれている主なものは7つのラッパによる「大患難」の事です。王国が近いことを知る、つまりキリストの臨在は「大患難のすぐ後」であると記されています。

解釈が混乱している一例をあげて見ますと、ものみの塔発行の「啓示の書」の本には、第七のラッパが吹かれる時の注解として、次のように説明されています。

「神聖な奥義は喜ばしい最高潮に達します！ それは、主エホバがご自分のキリストを共同の王として即位させられる1914年に、輝かしい壮大な仕方で堂々たる終わりを迎えます。」（「啓示の書—その幸福な最高潮」26章171ページ2節）

聖句によれば、キリストの臨在までに第6番目までのラッパによる災いがすでに終わっていないければなりません。しかし「啓示の書—その幸福な最高潮」は明確に第7番目のラッパが吹かれたのは1914年であるとし、にも関わらず「大患難はなお将来」のこととされています。

さて、この第7つまり最後のラッパは極めて重要な時です。この後は、「大バビロン」の滅びと「野獣と偽預言者」の裁きに繋がってゆきますが、この時点ですでに、聖書預言で分からないことはもう何も残っていないと聖書は述べているからです。

「第七のみ使いが吹き鳴らす日、彼がラッパを吹こうとするその時に、神が預言者なるご自分の奴隷たちに宣明された良いたよりに基づく神の神聖な奥義（神の秘められた計画 [新共同訳]）は、確かに終わりに至る」。（啓示10:7）

このこと重要性を示すために、もう一度引用します。

「神聖な奥義は喜ばしい最高潮に達します！ それは、主エホバがご自分のキリストを共同の王として即位させられる1914年に、輝かしい壮大な仕方で堂々たる終わりを迎えます。」（「啓示の書—その幸福な最高潮」26章171ページ2節）

何が「堂々たる終わりを迎え」たのでしょうか。「神の神聖な奥義が」です。

「神の神聖な奥義」とは「神の秘められた計画、秘儀」と言われてきた、「聖書に記されている隠された真理」のことです。

そして、7番目のラッパが吹かれると、その全ては「終わります」つまり、もう秘密はすべて明らかになっているということです。

あるいは神の計画、その後の出来事も、「まだ分からない」というものはもう何一つないという段階だということです。

だからこそ、第7ラッパが吹かれた時には正に、「輝かしい壮大な仕方で、その最高潮を迎える」事になるでしょう。

で、それはいつの事ですか？

ものみの塔によれば、それはすでに100年近くも前の1914年に「堂々たる終わりを迎えた」事になっています。

では、当然その時から、神の目的や、神の本当のご意志が分からなかったり、聖書の解釈を変更したり、食い違ったりするような時代はもう終わったんですね。

本当に1914年に「王国が立ったのなら」そのはずですが、その辺はやっぱり、当の「ものみの塔出版物」にお答えしていただいた方がよろしいかと思しますので、その一例をご紹介します。

「啓示の書—その幸福な最高潮」の書籍の冒頭文の引用です。

「ものみの塔協会は、早くも1917年に、「終了した秘義」という題の本を発行しました。それは聖書のエゼキエル書と啓示の書を一節ごとに解説した本でした。その後、世界の出来事が引き続き聖書預言の成就として展開するにつれて、「光」と題する、時宜にかなった2巻の書物が準備され、1930年に発表されました。光は引き続き『義なる者のためにきらめいた』ので、エホバの証人は1963年に、『『大いなるバビロンは倒れた！』神の王国は支配する！』という題の本を発行しました。その後、『義なる者たちの道筋が一層明るくなる』につれ、『その時、神の秘義は終了する』という題の書籍が、1969年（日本語、1976年）に出されました

今この時期に、一体どうして啓示の書に関する本がもう1冊発行され、再印刷されたのでしょうか。なお一層強力な理由は、現在の真理と合致した最新の理解を保つ必要があるということです。エホバはご自分のみ言葉の意味を解明する、より強力な光を絶えず照らしておられるので、大患難が近づくにつれて、啓示の書と共に他の預言に関するわたしたちの理解は、一層鮮明なものにされることが期待できます。（啓1章8ページ）

未だに、そしてこれからも「現在の真理と合致した最新の理解」を保ち続ける努力を払う必要があるようです。

「1914年に神聖な奥義は堂々たる終わりを迎えた」という主張は「堂々たる失敗に終わった」と現在の状況は語っていると誰でも認めることでしょう。

毎月出される「現在の真理」の隅に100年のほこりをかぶった膨大な量の「過去の真理」やカビの生えた「古い真理」が、山積みになっている絵が浮かんで来ます。